

アリストテレス『分析論後書』における知識の身分について

酒井健太朗（さかいけんたろう）

（九州大学大学院博士後期課程）

要旨

アリストテレスの『分析論後書』（以下『後書』）という著作は、プラトンの『メノン』や『テアイテトス』と同様に知識論の古典として十分な価値を持っている。それにもかかわらず、この著作の持つ意義は現代まで正当に評価されてきたとは言えない。英米圏において古代哲学の研究が進んだここ半世紀においても、『後書』はあくまでも科学的説明の理論から読まれることが多かった（e.g. Ackrill (1981), Burnyeat (1981)）。このような読み方は限定的には正しいかもしれないが、私はむしろ、『後書』は知識ないし論証的知識を取り扱った著作として、より広い観点から読まれなければならないと考える。以上のことを踏まえた本稿の目的は、『後書』における論証的知識の構造を明確にし、それがいかなる特徴を持った知識論であるかを明らかにするところにある。

本稿の構成は以下のようになる。まず第一節において、『後書』が論証を主題としその明確化を目的として著された著作であるということを簡潔に述べることによって、アリストテレスの問題意識を抽出する。次に第二節において、アリストテレスの知識概念はそれと同定できないような先立つ認識から始まることを確認したうえで、『後書』B巻において頻繁に登場する月蝕や雷鳴のような自然事象については、その「何であるか」の一部である部分的定義が先立つ認識として必要であることを明らかにする。さらに第三節においては、アリストテレスの知識を「必然性」の観点から探る。Barnes (1993) はアリストテレスの知識概念を”high-grade knowledge”と呼んだが、それはアリストテレスが知識に対して厳密な必然性を要求したことに由来する。Patzig (1968) はこの必然性が推論形式のような論理的なものに基づくと述べるが、そうではないと考えられる。第二節の考察を踏まえたうえで、存在論を基礎とした知識論をアリストテレスが考えていたと私は考えたい。もちろん先行研究においては同じような解釈が Charles (2000) や Deslauriers (2007) によって提唱されているが、彼らは『形而上学』を知識論の基礎として重視している。その際、彼らは『後書』における類・種差と『形而上学』における質料・形相を安易に同定する傾向にある。しかし、そもそも『後書』において質料概念が登場していない以上、そのような同定が可能か否かについては議論の余地があると考えられる。管見では、知識論の基礎として存在論を論じる際には『形而上学』以前に『カテゴリー論』を重視する必要があると思われる。本稿は『カテゴリー論』の議論に本格的に踏み込むつもりはないが、存在論を基礎とした知識論を論じるうえで、『カテゴリー論』に至る道筋を示すことにしたい。